
World of Fantasy After

ピエロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World of Fantasy After

【Nコード】

N4419U

【作者名】

ピエロ

【あらすじ】

記憶力0、意地汚い、面倒くさがり、ダメ人間の代名詞なのに何故か強い主人公的存在 桂峰 神紅は自分が異世界にいるということを忘れていた。それでもって食事をすることも忘れて森の中で倒れていたところをエルフの少女 ラクア・ローレンスに助けられ向かう方向が同じという理由でとりあえず一緒に旅する。そして主人公は異世界で何をするのか？ そんな異世界モノのファンタジーなストーリー。

プロローグ とある森の中で

「ハラ減ったなあ…ぼくもう死んじやいそう…」
ぼくは今倒れている、体に力が入らない。

(どうしてこんなことになったんだっけ?)

「……………」

(ダメだ、まったく思い出せない… 誰か人でも来ないかな?)

「……………」

(来ないだろうな、こんな森の中じゃ…どうしてこんな森にいるんだっけ?)

「……………」

(本当にダメだ、まったくもって思い出せないや、それになんだか眠くなってきたなあ…)

「……………」

(ああ…でも こんなところで寝たら魔獣に襲われちゃうな)

「……………」

(ん…ここはいつそ寝てみようかな?起きていても何もできないし、魔獣が来ても助からない)

(…じん、寝よじ)

|| || ああ〜でも、どうせなら気持ちよく眠れるといいな || ||

第一話 黒い行き倒れ

「ん〜…」

(もう朝・・・早いなあ・・・)

ぼんやりした意識のままベッドから起き上がりカーテンを開ける、
日差しが目を突き刺す。

「まぶしい・・・」

思わず声に出してしまっほど眩しい。

(眠い…な、とりあえず顔でも洗って朝食をとろう…かな?)

(さて、次はどこに行こうかしら?)

完全に目が覚めたわたしは朝食のスープを飲みながら考える。

(ん〜この辺で一番有名なのはオーエン城とその城下町かな、ああ
…でも前の王が死んでからあまりいい噂は聞かないからなあ〜、
ここは危ないけど森を抜けてナルサ村に行く方がいいかな?)

(・・・うん、そうしよう そうと決まれば早速準備しなくちゃ)

朝食を食べ終えて手短に荷物をまとめ、わたしは宿屋を後にする。
森には徒歩でも数十分ほどで着くが、その森は森といってもかなり
り広いらしく、迷うとなかなか出られないと少々厄介な森らしい。

(まあでも、道から外れなければ日没までには抜けられるらしいし
…大丈夫よね?)

——森を進むこと3時間——

どこを見ても木しかない森の中で妙なものを視界の端にとらえた。

「ん?何かしら?」

近寄ってみるとボロ布のようなものが落ちている。

「……………」

よく見るとボロ布の間から足が出ている。

「人!!」

(生きてるのかな?)

わたしは近くにあった木の棒で突っついてみる。

…モソモソ…

(よかった、死んではいないみたいね)

今度は起こしてみようとビシバシと叩いてみる。

「起きない……………」

今度はもつと強く叩いてみる。

「……………ガウ!!」

「きゃっ!!」

いきなり棒に噛み付いてきた。

わたしは思わず尻餅をついてしまつ。

「あれえ?ここはどこ?」

キョロキョロと辺りを見回し、とぼけた声で言う謎の行き倒れの
人。

（……………何なのよ、この人……………）

第二話 遠い国から？

わたしはまだ辺りを見回してる黒服の男の人に声をかける。

「あなた何者なの？ こんなところで何してたの？」

わたしが声をかけると、彼は初めてわたしに気づいたかのようにこちらを向く。そして口をポカン 開けたまま静止する。

「……………」

……2分が経過——

わたしはもう一度声をかける、すると……

「…………忘れちゃった、ぼくって何者なんだろう？」

信じられないことを言った。

「……………」

(この人…何を言ってるの？ 自分のことを忘れるなんて…)

わたしは言葉が出ない。

「じゃ、じゃああなた名前は？」

別の質問を試みる。

「…………忘れちゃった」

彼はサラリと言った。

(・・・信じられないわ、普通自分の名前を忘れるかしら?)

「じゃあ、何か自分のことがわかるものはないの?」

諦めず聞いてみる。すると彼は皮の袋を取り出し、中身をばら撒く。

どこから出したかは謎だけど・・・

しかし、その中身はノート一冊にペンが一本、銅貨三枚に石ころがひとつと透明できれいな丸い玉が少数と、大したものが入っていないかった。

わたしはその中からノートを手にとってみる。するとそこには決してうまいとはいえないような字で、『桂峰 神紅』と書いてあった。

「あなたの名前ってコレ?」

ノートに書いてある名前を指差して、わたしは聞いてみる。すると彼は思い出したかのように手をポンと叩いて言った。

「そうだったそうだった、これがぼくの名前だ、ぼくは桂峰神紅っていうんだ なかなかカッコいいだろ?」

自慢げに彼は言うてくる。

「カッコいいのは別として不思議な名前ね、どこの国の人なの?」

わたしが聞いてみると、彼は遠くを見ているかのように上を向いて

「フツ…風にでも聞いてくれ」

なんて似合わないことを言う。

しかも丁度よく風が吹く…

「……こんなカッコつけたこと言ってるけど、きつと忘れたんだろうなあ」

「ところで君は誰？見たところ旅の途中かな？」

「え？ ああごめんなさい、わたしはラクア、ラクア・ローレンスっていうの、一応よろしくね。それにしてもよく旅してるってわかったわね？」

「ん？そりゃあ〜いかにも冒険者ですって格好してるもん」

当然といわんばかりに言った。

「そうかな？動きやすさを重視した服なんだけどなあ…？ でもあなたの服も変わってるわよね、何 っていうの？」

「コレかい？これはね羽織と袴って、いわゆる『さむらい・すたいる』って言うんだ」

「……聞いたことのない名前の服ばかりに少し戸惑ってます。」

「へえ〜あなたのいた国って珍しいものが沢山あるのね」

「さあ？忘れちゃった」

とぼけたことを言うカツラミネさん、頭が痛くなってくる発言だ。

「それよりカツラミネさんよね？こんなところで何してたの？」

「・・・寝てた」

「どっして？」

「ん〜…そういえば何で寝てたんだろう？」

そういつてカツラミネさんは考え込む。そしてその時――

「――ぐうぐううう・・・――」

カツラミネさんが盛大にお腹を鳴らした。

「もしかして、お腹をすかして倒れたとか？」

「・・・どうやらそうみたいだ」

本当に頭が痛い・・・

「じゃあとりあえず何か食べる？」

わたしがそう言つとカツラミネさんはガバツと身を起こして言つた。

「いいの？」

「少しだけよ」

そう言つてわたしは荷物から大きめの干し肉を取り出す。

「これでいいかしら？」

カツラミネさんはよだれを垂らしながらガクガクとうなずく。
わたしが干し肉を渡すとガフガフと食べ始めた。

「カツラミネさんはどこかに行く途中なの？」

干し肉にかぶりついているカツラミネさんにわたしは聞く。

「ん？多分そうだよ」

口の中の肉を飲み込んでから言う。

「ふんどどこに行くの？」

「あっちかな？」

カツラミネさんがわたしの行き先と同じ方向を指差す。

「あら、それじゃわたしと同じ方向ね、どうせなら一緒に行かない
？」

「ん？いいよ」

そう言って最後の一かけらを飲み込む。

「それじゃあ、あらためて、わたしはラクア・ローレンス、よろしくね」

「ぼくは桂峰 神紅、よろしく」

(ふふっ 少しの間かもしれないけど楽しい旅になりそうね)

第二話 遠い国から？（後書き）

どうだったでしょうか？

ご意見、感想などありましたら ぜひ！！コメントください。

第三話 夜の一時

その後、多少魔獣と遭遇したもののどうにか日没前にナルサ村に着いた。が……

「カツラミネさん！どうして戦ってくれないのよ!？」

（遭遇した魔獣と戦ったのはわたしだけよ!）

「だって〜面倒だし疲れるじゃん？」

「…わたしが疲れるのはいいってこと……それ？」

「だって君って剣の扱いがうまいだろ？」

「!?!」

（え?どうしてわかったのかしら……?）

「ん?どうしたの?早く宿でも見つけて休もうよ、疲れてるんだろ?」

「ちょっと待って!どうしてわかったの?」

「え?何が?」

「いや……その、わたしが剣を使えることよ……」

するとカツラミネさんは「ああ〜そんなことか……!」とつぶやいて言った。

「まずあれ？って思ったのは手かな？女の子の手にしてはマメは多かったからさ、あとは単純に太刀筋 が上手かったからそうじゃないかな？って思ったただだよ」

「……………」

(すごい観察眼だわ・・・とてもさつきまでボケてた人には見えな
いわ)

「さあ話はここまで、宿を見つけて休もうよ、もうお腹が減って倒れそうだよ」

「…………そうね、早く見つけましょ」

(…カツラミネさんって何者なのかしら?)

…………それから約5分……

ようやく宿を見つけた。

「2名で1泊お願いね、あとご飯もつけてちょうだい」

わたしは注文する、わたしの横ではカツラミネさんがグデ〜と座り込んでいる。

「かしこまりました、いつ食事にします?」

宿の御上がそう言うと、カツラミネさんはサッと起き上がって言う。

「今すぐ用意してください!」

「かしこまりました、それでは部屋へご案内します」

そう言って歩き出す御上をわたしたちは追いかける。
案内されたのは割と大きな部屋だった。しかし・・・

「何で一緒の部屋なのよ!？」

「さあ?どつでもいいじゃんそんなの、それよりご飯はまだかなあ
」?

そう言ってツウーとよだれを垂らすカツラミネさん。

「どつでもよくないわよ!」

「しょーがないじゃん、一部屋しか空いてないって言っただから」

「・・・それはそうだけだ」

(やっぱり恥ずかしい、会ったばかりの人といきなり相部屋なんて
・・・)

そんなことを考えていると「お待たせしました」と言って御上が
夕食を持ってきて言った。

「ご飯だ!..!」

はしやぎ出すカツラミネさん。
そんな彼を見ていると、恥ずかしいと思っていた自分がバカらし
くなってくる。

「ねえねえ〜早く食べようよ〜」

「……………そうね、食べましょ、わたしもお腹が減ったわ」

わたしがそう言つとカツラミネさんが「いただきます」と言つてガフガフと音を立てながら食べ始める。わたしもそれにならう。

「そうそうカツラミネさん、いくつか質問していいかしら？」

スープをすすっているカツラミネさんにわたしは聞く。

「いいよ、何かな？」

ぷはあ〜とスープを飲み終えてカツラミネさんが言う。

「カツラミネさんって戦いとかできます？」

「さあ？どうなんだろう？」

「……………じゃあカツラミネさんってどこに行く途中だったの？」

「ハッキリした場所は忘れちゃった……」

「……………何歳なの？」

「ん〜…一番新しい記憶では17歳かな？」

「ええっ!?!？」

「え？何？どうしたの？」

(信じられない…わたしより1歳年上なだけじゃない！)

「人って見かけによらないわね・・・」

「そうかな？」

「ええ・・・」

驚きのあまり言葉が出ない。

「そういえばラクダさん、君はどこに行くつもりなんだい？」

いきなり話をふってくる。

「ちょっと待って、ラクダさんって誰のこと？」

「ん？君の名前だろ？」

「ちがいます！わたしの名前はラクアです！ラクア・ローレンスっていうの」

「ふうんまあいいや、で？どこ行く途中なの？」

「・・・エルフとか亜人のいる国よ」

「へ？人間以外にも人っているの？」

「え？そりゃもちろんいるわよ」

「君は……人間なの？」

「わたしは……エルフよ」

「へえ」

感心したように言う。

「どうしたのよ？」

「いやあくエルフってみんなラクアさんみたいにキレイなのかな
って」

「えっ？わたしが…キレイって／＼／」

「ん？何？どうしたの？」

「別に……どうもしてないわよ／＼／」

突然の言葉に戸惑ってしまふ。

「じゃあエルフがいるなら他にもそういう人たちがいるの？」

自分のご飯を食べ終えたカツラミネさんはわたしのご飯にそくと
手を伸ばしながら言う。

「…ええ、他にも竜人族とか獣人族、ドワーフに人魚とかかしら」
なぜかそれに気づかないわたし。

「たくさんいるんだね」

「まあね、でも人間以外の種族を嫌う人たちは沢山いて、迫害したり奴隷として売ったり、中には理由もなく殺す人もいるわ」

「……………」

「だからそういったことのない国を亜人たちがつくったのよ」

「……………」

「理解してる？」

「もちろん！」

胸を張って言うカツラミネさん。

(自信ありげに言うけどきつと理解してないだろうな)

「まあいいわ、そろそろ…って、ちょっと！わたしのご飯がないじゃない！」

「あれ？どこにいったんだらう？」

「あなたが食べたんでしょ！？」

「失敬な！ぼくじゃない」

「……………はあ…もういいわ、今日はもう寝ましょ」

「そうだね、ぼくももう眠い」

そう言ってカツラミネさんはモソモソとベッドに入っていく。

「じゃあ明かり消すわよ」

返事がない、近ずいて見てみるとグワ〜と口を開けて寝ている。

(ふふっ おもしろい人)

「……おやすみなさい、カツラミネさん」

そうして明かりを消し、わたしもベットに入り眠りについた。

第三話 夜の一時（後書き）

意見、感想、などなどありましたらコメントください。

登場人物紹介

桂峰かつらみね 神紅しんぐく

身長・体重・歳・184cm・48キロ・??歳

・種族・人間

黒の和服にサングラスという奇怪なファッションの主人公的な存在。

忘れっぽくて意地汚く、そのくせ面倒くさがりで職業不詳の謎の多い男。

ラクア・ローレンス

身長・体重・歳・163cm・46キロ・16歳

・種族・ライトエルフ

炎髪灼眼の有名なあの方とは反対の水色の髪に蒼い眼の少女。

ハイド・ブライン

身長・体重・歳・176cm・62キロ・21歳

・種族・竜人

桂峰の奴隷1号。

歌って踊れて戦えて、たまに損な役割を担う竜人。

エリナ・アタランティア

身長・体重・歳・145cm・42キロ・15歳

・種族・ライトエルフ

桂峰の奴隷2号。

攻撃、回復、補助、といろいろな魔法が使える万能な少女。

ティネルローゼ・アルイーマ

身長・体重・歳・136cm・29キロ・12歳

・種族・獣人

桂峰の奴隷3号。

幼いながらも莫大な魔力を持っている少女。

石宗 豪

身長・体重・歳・170cm・55キロ・19歳

・種族・人間

エヴァン城の総大将を勤めている、ノリのいいやつ。

今は剣士だが前は暗殺・情報収集を得意としたチエイサーだった

桂峰の友人。

巡夜に好意をよせている。

雪咲 雅

身長・体重・歳・155cm・44キロ・18歳

・種族・人間

舞うように戦う舞姫という珍しい職業の桂峰の友人。

桂峰のことが気になっているとか・・・

伊志井 将

身長・体重・歳・171cm・52キロ・18歳

・種族・人間

かなり強いとか・・・なんとか

錬金術を使えるアルケミストで桂峰の親友。

巡夜 めぐりよ 星奈 せいな

身長・体重・歳・162cm・46キロ・19歳

・種族・人間

精霊使いという特殊な職業をしている桂峰の友人。

おっちょこちょいだが頼りになる人で、この人もまた・・・

第四話 朝の出来事

わたしはザワザワとした物音に目を覚ました。

(もう朝かあ)

「おはようカツラミネさん」

そう言っつてわたしは隣のベッドで寝ているカツラミネさんの方を見る。

「……………」

(まだ 寝てるみたいね…………)

わたしはカツラミネさんの体を揺する。

「起きてください カツラミネさん」

「……………んん〜」

モソモソと動き出す。

「……………んん〜どうしたの？」

のっそりと起き上がった言っつ。

「おはようカツラミネさん」

「……………おはようっ」

「さっそくだけど出発の準備してね」

「・・・何で？」

「出発するから」

「・・・今何時？」

「そうね〜6時30分頃かしら？」

「・・・まだ早い、寝る」

そう言っつてまた眠り始める。

「ダメです！起きてください！」

わたしはカツラミネさんの足を引っ張ってベッドから引きずり落とす。

「グギャ！」と妙な声を上げて床に落ちる。

「大丈夫ですか？」

「・・・あまり大丈夫じゃないな、それに目も覚めたよ」

「そう、じゃあ準備して行きましょうか」

ニッコリと微笑んで言う。

「・・・」

「ん？どつかしました？」

「いや、何も・・・」

そう言っつてカツラミネさんは準備を始める。

(何だったのかしら?)

.....

「さて、どこの行こうかしら？」

「・・・ねえ、朝ごはんは？」

「ないわよ」

「どっして？」

「お金がないからよ　カツラミネさんお金持ってないから節約もしなきゃいけないの」

「・・・お腹減った」

「我慢してね」

わたしがそう言っつと残念そつな顔をするカツラミネさん。

「しょーがないじゃない、ね？」

「・・・わかったよ」

「ありがとう じゃ、行きましょ」

「どこに?」

「とりあえずエヴァン城に向かいましょ この大陸では一番大きなところだから」

「ふうん了解」

「――こうして村を後にした――」

第四話 朝の出来事（後書き）

今回は少し短いです

すみませんm（）（）m

第五話 昼の出来事

村を後にしてから約2時間

「ねえ、まだ着かないの？もう疲れたよあ〜」

ダダをこねはじめるカツラミネさん。

「まだ2時間しか歩いてませんよ」

「何を言ってるんだい、2時間もだよ」

「・・・目的地まで2日はかかるわよ」

「なっ!?!」

ガツクリと膝をつくカツラミネさん。

(うわあ〜面倒くさあ〜)

「ほら、ちゃんと歩きましょう 歩かなきゃ着きませんよ」

「・・・」

「おいていきますよ〜?」

「あっ いいこと思いついた」

「ん?何?」

「ふっふっふっこの疲れと空腹を癒しながら進む方法を思いついちゃったのだよ!」

「へえ、何かしら?」

「おんぶして」

「却下!」

「何ですよ?」

「当たり前でしょ! 馬鹿なこと言っていないで行きますよ!」

「ちえ」

そう言ってしゅしゅと立ち上がるカツラミネさん。

(まったく、先が思いやられるわ・・・)

・・・それから約1時間――

「あっ見てくださいよカツラミネさん、あれって馬車じゃありません?」

「ええ? ああ、そうだねえ、馬車みたいだね」

「でも何か様子が変わらない?」

「ふん、興味ないね」

「・・・カツラミネさんって友達少ないでしょ？」

「まさか〜100人は軽いね」

「・・・まあいいわ あっ！ほら！道をそれて森に入りましたよ」

「へえ〜 で？ どうすんの？」

「追いかけてみましょうよ」

「ん〜しょうがないな、面倒くさいけど」

わたしたちは追いかけて森に入る。

(ナルサ村の近くって森が多いのよね)

馬車を通ったであろう道を歩いていくと・・・奥から叫び声が聞こえた。

「ちよっ！今に何！」

「叫び声だね」

「行きましょ！何かあったのよ！」

「はいはい。わかったよ〜」

「もう！早く行きましょ」

こうして森の奥へ向かった

第六話 盗賊たちと

森の中を走っていくと人らしき影が見えてきた、その中にわたしは飛び込む。

「あなたたち！何をしている！」

飛び込んだ先は倒れた馬車に決してキレイとはいえない服装の人たちと立派な服装の人、それに盗賊らしき者たちに馬と首のない人の死体がある。

盗賊らしき者たちは突然の登場に少し驚いた様子だった。

「あなたたち、何をしている」

わたしはもう一度呼びかける。

「ああ？なんだあ嬢ちゃん なんのようだあ？」

リーダー格らしき男が言う。

「もう一度問う、何をしている」

すると男はニヤニヤと笑いながら答えた。

「見てのとおり人を殺したただけだが？ そいつはちよいとワケありでな」

「あなたたちは何者だ」

「ハハッ！それも知らずに飛び込んできたのか！」

男は腹を抱えながら笑う。

「俺たちは聞けば誰もが泣いてひれ伏す偉大な盗賊団！『毒牙』だ
！！」

ババン！と効果音が出そうな勢いで言う。

「いよお！さすが兄貴！」

噓し立てる子分。

「……まあいいわ、この場は見逃してあげる 去りなさい」

「ハッ！何言ってたんだ嬢ちゃん？そんなこと言える状況か？」

そう言ってゲラゲラと笑う盗賊たち。

（まあ1対6じゃ誰もがそう言うわよね・・・）
「コレが最後よ 去りなさい」

「強気な嬢ちゃんだな、気に入ったぜ おいお前ら！殺さずに捕らえろ！」

「へい兄貴っ！了解っす！」

「忠告はしたわよ！カツラミネさん、いくわぁ・・・よっ？」

後ろを見るがカツラミネさんがいない。

（ええ？何でいないのよ！）

「何よそ見してんだっよっ！」

そう言って一人が剣を振り下ろしてくる。

「まったくもう！ カツラミネさんってば！」

わたしは腰に納めてある剣を抜き柄の部分で向かってきた男のみぞおちを殴る。

男が白目を向いて倒れる。

一人目に続いて二人目が槍で突いてくる、それを体を逸らしてかわし下から剣を振り上げる。

ザシュッ！

(手応えあり……)

「ぎゃあああああ！」

叫び声をあげながら男が倒れこむ。

見ると右腕が男と一緒に転がっている。

「この野郎！」

二人がやられて怒ったのか、四人がいつせいに斬りかかってくる。

(む・・・四人いつせいか しょうがないな・・・)

剣を下段に構える 剣に魔力を溜め込む。

「あなたたちが悪いんだからね！」

剣を振り上げ、魔力を放つ。

光がその場をおおい 4人盗賊たちは地面に倒れ 気絶した。

第七話 A s u r p r i s e a t t a c k

「なつ 嬢ちゃん！魔法が使えるのか!？」

4人が倒れたことであからさまに驚いてるリーダー格の男。

「ええ、職業柄ね」

「っ！しゃーねーな今回は許してやる！次はないからなあ！」

「ビシイ！ と効果音が出そうなくらいの勢いで指を指し、いそいそと部下を担ぎはじめる。

「あなた、このまま逃げられると思ってるの?」

「ふっ・・・嬢ちゃんこそ俺様を捕まえられると思ってるのかい?」

「もちろん 逃がすつもりはないわ」

「ぶっはははははははははは！嬢ちゃんおもしろえな！俺様はご近所では『疾風のマルド』と言われるくらい 素早い奴だと言われているんだぜ」

(こいつの名前マルドって言うのか・・・どこかで聞いたような・・・)

「おしゃべりはここまじよ」

わたしは言い終えたのと同時に剣を下段に構えたまま姿勢を低くして突っ込む。

「おおお！？早えな！」

マルドはすでに部下を全員担いでいる。

(大人数担いでいる分動きは鈍るはず・・・でも少し大きめな体なだけなのにあの大人数担げるなんて

マルドも魔法が使えるってことかしら・・・)

(まあいいわ・・・)

わたしはブレーキをかけ、マルドの目の前に止まる。
マルドの右肩めがけて剣を振り上げる。

(捉えた・・・)

が・・・振り上げた剣は空を切り裂いただけだった・・・

(なっ!?)

「ふっ嬢ちゃん おしかったな」

気がつくと40メートルほど先にある木の上に立って笑っている。

「あなた!どうやって!?!」

「まあまあそれは次の機会に、それまで覚えてるよなあ!」

そう言ってどこかに消えてしまった。

(・・・逃がしたか)

わたしは周りに気を配りながら襲われていた人たちに歩み寄る。

「お怪我はありませんか?」

わたしは服の立派な人に尋ねる。

「あつ…ああ 助かった…一人殺られたが」

「ごめんなさい 助けるのが遅れてしまって」

「いやっ！ そんな誤らないでください」

「…わかったわ じゃあ何か手伝いましょうか？」

「じゃあ、馬車の中にみんなを入れてくれないかな？」

「わかったわ」

わたしはキレイとはいえない服装の人たちを誘導し馬車の中に入るように言う。

(…この人たち、おそらく奴隷ね)

「ねえあなた奴隷商人よね？」

「え？ああそうだが」

「コレを気にやめてくれないかしら？こんなこと…」

「…」

「…もういいわ」

わたしはまた馬車への誘導はじめる。

「おねえちゃん危ない！」

いきなり知らない女の子の声が耳に届く。

「え？」

ドカツ・・・

頭の後ろに痛みを感じた。

それと同時に体に力が入らなくなり倒れてしまう。

「助けてくれたことは礼を言っぞ、だがこっちも商売だからなあ！」

その言葉を最後に わたしは意識を失った。

第八話 お助け

目が覚めるとわたしは馬車の中だった。

「・・・あれ?・・・なんでこんなところに?」

(奴隸の人たちを馬車に誘導していたのは覚えているんだけど、そこから先が思い出せないわ)

そんなことを考えていると一人の少女が駆け寄って来た。

「お姉ちゃん 大丈夫?」

「え?まあ頭が少し痛むけど大丈夫よ ありがとう」

「そっか〜よかった〜」

そう言ってニッコリと笑う少女。

(・・・かわいいノノノ)

「お姉ちゃんどうしたの?」

「ええ！？いや・・・なんでもないわ」

「ふん そういえばお姉ちゃん名前は？」

「わたしラクア、ラクア・ローレンスよ あなたは？」

「わたしはティネルローゼ・アルイーマ、ティルって呼んでね」

「ええ、よろしくねティル それよりここはどこなの？」

「ここ・・・あいつの馬車の中だよ」

「あいつ・・・まさかあの奴隷商人の！？」

「うん・・・」

大変なことになってるわね、どうしたものかな・・・
奴隷の証の首輪もしっかりつけられているし、武器も盗られてる。

「・・・・・・・・」

「お姉ちゃん大丈夫？」

ティルが心配そうに尋ねてくる。
その動作がとても愛らしい。

(・・・かわいい／＼)

「・・・大丈夫？」

「え・・・ああ大丈夫よ　ありがとう」

「うん・・・ねえお姉ちゃん、これからどうなるのかな？」

「やっぱり奴隷として売られるのは怖いのね・・・」

「うん・・・」

「大丈夫よ、わたしの友達がきつと助けてくれるわ」

「本当!?!」

「ええ　普段は頼りない人だけどきつと来てくれるわ」

「いつ来るの?」

「そうね〜そろそろ来てくれそうなのがするわ」

「本当!?!」

テイルとそんな会話をしていると馬車の動きが止まった。
すると外から話し声が聞こえる。

「おい！その人じゃまだからどいてくれ！」

奴隷商人の声

「いやあくどいてもいいけど、奴隷たちを解放してくれたらね」

どこか気の抜けた声

「っ！ふざけんな！こつちも商売なんだよ！」

「いや〜ね ぼくの友達もいるみたいなんだよ」

「知ったことか！そんなこと」

「じゃあ力づくでもいいかな？」

「っ！ふざけるな！おいその竜人、あいつを殺せ！」

「はあああ！？おいおいご主人！俺今まで馬車引いてきたんだぞ！
？」

「黙れ奴隷の分際で！いいから殺せ！お前を殺すぞ！」

「・・・了解」

そう言っ**て**ぶつぶつ言いながら剣を手取る竜人。

「あれ？ぼくが用のあるのはあそこの商人さんなんだけどな」

「すまないな、奴隷の俺は逆らえないんだ 怨まないでくれ」

「ん？大丈夫だよ」

「ど**う**いう意味だ？」

「こ**う**いうこと」

そ**う**いうと男の姿が一瞬で消えた。

「な**っ**！？」

「は**っ**は**っ**は**っ**こ**っ**ちだよ」

男が奴隷商人の真後ろに立**っ**て剣を首につけている。

「な**っ**！？い**っ**た**い**ど**う**や**っ**て！？それ**に**俺の**剣**も！」

「ふ**っ**っ**っ**風**に**でも聞**い**てくれ」

「**っ**っ**っ**」

男の言葉に脱力する竜人。

「おい！竜人！何をしている！助ける！」

「もう遅いよ〜商人さん」

「ひいひいひい！頼む！命だけは！」

「残念でした〜もう助かりません！」

男が剣を振り上げる。

「いやだあああああああああああああ！」

その言葉を最後に商人の首が宙を舞った。

第九話 夕方頃の出来事

突然馬車が止まったと思ったら今度は奴隷商人の叫び声が聞こえた。

「え……今の何!？」

ティルが驚きと怯えを混ぜた声を上げてわたしに抱きついてくる。

「大丈夫よティル、わたしの友達が助けに来てくれたのよ」

「本当!？」

「ええ、さっきの悪い人をやっつけてくれたのよ」

「本当に本当!？」

「わたしは嘘をつかないわ」

わたしが言うのと嬉しさのあまりかぴよんぴよん跳ねながらはしやぎ出す。

わたしたちの話聞いていたのか、他の人たちの表情も明るくなっていた。

「ラクダさ〜ん あなたは完全に包囲されてま〜す、速やかに出てきてくれないかな?」

テイルと話しているところか気の抜けたマヌケな声が聞こえた。

「わたしの名前はラクアですよ!」

「またも名前を間違えられたわたしは思いっきり叫びながら馬車を出る。」

「あ、見い〜つけた」

「カツラミネさん わたしの名前はラクアですからね? ラクダじやありません!」

「何だ〜元気そうだね 心配して損したよ」

「あれ?心配してくれたんですか?」

(ちょっと意外だな〜カツラミネさんが心配してくれるなんて・・・何か嬉しいわね)

「当たり前だよ ラクアさんが倒れでもしたら誰がご飯を作るのさ?」

(前言撤回！嬉しいなんて少しでも思ったわたしがバカだったわ！)

「どうしたの？そんな怖い顔して？」

「別に・・・何でもないわよ！」

「お姉えくちやくん、どうしたの？」

そんなやり取りをしているとティルが馬車から出てきた。
それに続いて他の人たちも出てくる。

「あ、ティルちゃん 紹介するね、わたしの友達のカツラミネさん」

「ぼくとラクアさんって友達だったの？」

「カツラミネさん この子はティルちゃん、仲良くしてね」

わたしはカツラミネさんの言葉を無視して続ける。

「そういえばカツラミネさん、この人たちどうするの？」

「ん？そのみなさんのこと？」

「そうよ、みんなお金だって持ってないだろうし・・・」

「お金だったら奴隷商人のお金をみんなで分ければいいじゃん」

「でも服装とか・・・この格好なのよ？」

奴隷だった人の服装はみんな薄い布でできたもので、夜になつたら流石に寒い。

「じゃあみんなを町まで連れて行けばいいのかな？ そうしたらあとは自分たちでもどうにかなるよ　ね？」

「まあお金にはあまり困らないだろうし、でもできるの？」

「その力持ちな竜人さんに頼めばね」

その一言でいっせいに竜人へ視線が注がれる。

「え？俺ツスか？」

「頼めるかしら？ええくと・・・」

「ハイドだ、ハイド・ブライン」

「ハイドさんね、どう？頼めるかしら？」

「いやあそりゃ無理だ」

「え……でもカツラミネさんは……」

「無理なものは無理だ、あきらめな」

カツラミネさんはできると言ったが本人が無理みたいじゃ無理なのね……

「どうするの？カツラミネさん、無理だっ」

「ハイド君、頼めるかな？」

「もちろんだぜ旦那！」

（はぁ……？）

「できるってさ、よかったね、ラクアさん」

「いやいや、ちょっと待って！ この扱いの差は何？」

「ふっ……竜人は強いものに仕えるのだよ」

「……」

「よし！じゃあ早速準備しようか、ラクアさんに、ティルちゃんだっけ？ 手伝ってくれる？」

「もちろんよ」

「お手伝いさせていただきます！」

（あれ？ティルちゃんやけに気合入ってない？）

よく見ると目を輝かせてるし、何か頬が少し赤い。
いったいどうしたのかしら・・・？

第十話 出会い

全員の準備が整いあとは出発するだけになった。

(もう日が沈みかけているわね、出来るなら日が沈む前に町に着きたいわ)

「みんな準備できたわね？」

「おお~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

(みんな元気いいわね・・・)

「それじゃハイドさん、お願いね」

「ふんっ 言われるまでもない、下がってる」

そう言って全員と距離をとり体に力を込めはじめる。

「うおおおおおおおお」

パキッ・・・メキッ・・・

ハイドの皮膚が乾いた音を立てて体の変形し始める。

「おおおおおおおおあああああ！！」

バキバキバキッ！

「はあああああ………」

最後にもものすごい音を立てて体の変形を終える。

――竜化――

竜人族が使う変身能力であり、見た目は竜そのものに変身する。竜化を使うと筋力、耐久力、敏捷力、視力、聴覚、すべて感覚などが大幅にアップし、翼も生え飛行も可能になる。

「お……大きいですね……」

テイルが驚きの声を上げる。

確かに、竜化したハイドは体長が5メートルは超えている。

四肢は所々鱗がついて、太く長くなり、とても丈夫そうに見える。背中からは大きな翼が生えている。

胴体と顔はあまり変わっていない、竜化というよりは半竜化とい

ったほうが近い形態になってる。

「おい！時間の限りが一応ある、早く馬車の中に入れ 馬車ごと持ち上げて運ぶ」

「わかったわ、じゃハイドさん よろしくね」

「ああ・・・」

そう言っただけでも馬車の中に入る。

カツラミネさんも馬車に乗り込んですでに寝てる。

(・・・まったく・・・のんきな人ね)

カツラミネさんは口をがばくと空けてよだれを垂らしながら眠っている。

(今回はカツラミネさんに助けられたわね・・・まったく、不思議な人だわ)

「お姉ちゃん、あゝそっぽ」

元気な声でテイルが話しかけてくる。

「いいわよ、あっカツラミネさんも起こしましょ〜か」

「ふえ！？だつ・・・大丈夫です！起こさなくていいです！」

「え？何で？多いほうが楽しいわよ？」

「起こしちゃ悪いですから・・・もう／＼／」

「ふうん、まあそこまで言うなら あっ！そのエルフの子！一緒に遊ばない？」

「・・・え？ 私・・・ですか？」

いきなり声をかけられたからだろうか、少し驚きの声を上げて言葉返してくる。

「そうそう！ いやあ〜こんなところで同族に会えるなんて思ってもなかったわ」

「え？・・・あなたも・・・ライトエルフなの？」

「うん、わたしはラクア、ラクア・ローレンスっていうの よろしくね」

「あ・・・えつと私はエリナ、エリナ・アタランティアです」

「私はティネルローゼ・アルイーマっていうの、ティルって呼んでね」

「うん、よろしくねティル」

新しく友達も出来て、それから楽しく遊びながら過ごした。カツラミネさんは相変わらずで、ずっと眠り続けている。

（やっぱり平和が一番よね）

第十一話 再開？

出発してから約2時間、太陽は沈みあたりは暗くなってきた。

「そろそろ着くぞお！」

ハイドさんが大きな声で伝えてくる。

「わかったわ〜！ よしみんな、降りる準備して」

「はい」「」

各自準備に取り掛かる。

「あ、ティルちゃん カツラミネさん起こして」

「ふえ？わ・・・私ですか!？」

顔を赤くして驚いたように聞き返してくる。

（ん〜どうしたのかしら?・・・まあいいか〜）

「じゃ、よろしくね」

「え!?!あつ!あつ・・・」

口をパクパクさせながらおどおどしてるティルちゃん。

(かわいい／＼／＼)

と、そこまで考えたところで思考を切り替え準備に掛かる。

――それから数分後――

ドンツと馬車が揺れ 無事に到着した。

「おお～い着いたぞ!」

「よし、みんな降りて」

みんなを誘導してとりあえず馬車から降ろす。

「ああ・・・腕痛え～もう腕がパンパンだよ、お前たち重すぎ! 痩せるという事を知らないのか!」

ハイドさんが文句を言い始める。

が、ハイドさんの発言で女性全員がハイドさんに殺意のこもった目を向ける。

もちろんわたしも・・・

「ハイドさん、誰が『重い』ですって？」

「ああ？何だラクア？どうかしたか？」

「奴隷でまともな食事もらえない・・・それに加えて女性に『重い』って言うのは失礼じゃなくて？」

「あつ・・・」

ようやく自分が爆弾発言したことに気がついたのか、だらだらと汗を流し始め男性の方へ助けの目をむける。

わたしに続いて女性全員がハイドさんに詰め寄る。

「いやあ〜アレだ！言葉のアヤだ！なっ？」

必死の弁解。

「言い訳はそれだけですか？」

笑顔で切り捨てる。

それからまもなくハイドさんの叫びが響いた。

男性は皆下を向き「ハイド隊長お〜」やら「隊長の勇姿は忘れな
いっす!」やら「隊長!漢ツス!」

などなど涙を流しながらつぶやいてる。

そんな時・・・

「おい、お前たち!そんなところで何をしている!」

一人の男が大声を上げ、尋ねてくる。

格好を見るとどうやら兵士らしい。

「あ・・・えつと・・・私たち旅の者です」

エリナちゃんが答える。

「旅の者?そんな大人数でか?」

怪しげな目を向ける兵士の男。

「はい、私たちは奴隷ですので用件の方はどうかご主人様に」

「ん〜・・・では少し待っていてくれないか？上官を呼んでくる」

「分かりました」

そう言っつて兵士は走って行ってしまっつ。

「エリナちゃん、ありがとう 助かったわ」

「いえ・・・どうもです」

ペコリと頭を下げて言っつ。

「――それから数分後――」

他の兵士に比べるとはるかに立派な鎧を身に着けた男と大勢の兵士が来た。

「お前たちが旅の者か？」

立派な鎧の男が言っつ。

「はい」

礼儀正しく答えるエリナちゃん。

「確か奴隷なのだったな、お前たちの言うご主人様に会わせてくれないか？」

「分かりました、少々お待ちください」

そう言って、馬車へ向かっていくエリナちゃん。

(そういえばティルちゃんとカツラミネさん、どうしたんだろう?)

そんなことを考えていること約3分。

目をこすり、あくびをしながらティルちゃんとカツラミネさんが馬車から出てくる。

(あゝティルちゃんも寝ちゃったのか)

「カツラミネ様、こちらの方がお話があるそうです」

エリナちゃんが言う。

「んゝ話? あゝめんどくさいから帰ってもらってよ」

手をひらひらと振ってあくびをしながら馬車に戻ろうとするカツラミネさん。

「カ・・・カツラミネ様！待ってくださいよ〜」

カツラミネさんの足にしがみついて止めようとするエリナちゃん。まるでダダをこねた子供のよう。そんなやり取りをしていると・・・

「桂峰！？桂峰じゃないか!？」

立派な鎧の男が驚きの声を上げる。

「ん？誰？」

本当に分からない、といったように答えるカツラミネさん。相手の方は知っているみたいだがカツラミネさんの方は覚えがないらしい。

「豪だよ！石宗 豪！」

第十二話 日本の朝は酢豚とビール

目が覚めるとそこはそれはそれは立派な部屋だった。

(あれ・・・？何でわたしこんなところに居るんだっけ・・・？)

思い出せない・・・

それから数分間思い出してみようと試みる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

(あっ・・・)

「思い出した・・・」

「――時間を遡って昨日の夜――」

「俺だよ！俺！ 石宗だよ！」

「だからあく知らないって言ってるでしょ？しつこい人は嫌われるよ？」

先ほどの威厳の漂う態度はどこへ行ったのか？カツラミネさんが「知らない」の一点張りの答えに慌てるイシムネと名乗る男。そんなことはお構いなしにそっぽを向くカツラミネさん。

「あの旦那？ その人知り合いじゃないんですか？」

ハイドさんが言う。

「君まで何を言ってるんだいハイド君、ぼくはこんな人知らないって先から言ってるだろ？」

「でも旦那・・・向こうは知ってるみたいですよ？」

「他人の空似だよ」

やれやれといった感じにいうカツラミネさん。

「・・・・・・・・」

その横ではなにやらイシムネさんという男が考え事をしてる。

そしてハッと顔を上げて言う。

「桂峰、お前腹減ってないか？それに宿とかどうするんだ？何ならこっちで用意するぞ？」

その言葉にピクッと反応を示す。

「ああ、そういえば確かステーキが山のようにあったなあ」

更なる追い討ち。

カツラミネさんの口からよだれがツーンと垂れる。

「いやあ、思い出した！そつだよイシムネ君じゃないか！早く言ってくればいいのにな、まったく」

「」「」「」「」「」「」

その場に居たほとんどの人がカツラミネさんに白い目を向ける。
もちろんわたしも。

「さっ！何ボサっとしてるんだい、早く行こつじゃないか！」

鼻歌を歌いながら歩いていくカツラミネさん。

「ねえ、ティルちゃん、エリナちゃん、ああいう大人にはなっちゃダメよ……」

わたしの言葉に首をかしげる2人に思わずため息をついてしまう。

(こうなったら わたしが良いほうに導かないと！)

そう意気込んでわたしも後を追う。

わたしの胸に新たな決意が生まれた夜だった。

—————

と……そこまで思い出してベッドから起き上がり、着替えて部屋を出る。

すると同じようにエリナちゃんとティルちゃんが部屋から出てきた。

「あつ ラクアお姉ちゃん」

「ラクアさん おはようございます」

「2人とも おはよう」

「ラクアさん ご主人様はどこに居るか分かりますか？」

「ご主人様？ああカツラミネさんね、ごめんなさい 分からないわ」

「そうですか・・・」

「とくいうか、何でカツラミネさんがご主人様なの？」

「ご主人様はご主人様ですから、どうかしたんですか？」

「いえ なんでもないわ・・・」

3人で話していると今度はハイドさんが部屋から出てきた。

「ん？お前たち何してんだ？」

「あゝハイドさんだ おはよう」

「お？テイルか、よい朝だな どうだい？これからお兄さんと散歩
でもしないか？」

「おはようございます ハイドさん」

「おはようハイドさん 朝っぱらから何言ってるの？」

「うるせえなあゝ邪魔するんじゃないやねえよまったく・・・ そうだら

クア、旦那はどこにいるかわかるか？」

「さあ？まだ寝てるんじゃないかしら？」

すると突然……

ゴーンーゴーンーゴーンーゴーンー……

大きな鐘の音が鳴り響いた。

「今が目覚ましの時間みたいね、この音だしカツラミネさんも起きてくるんじゃないかしら？」

「……いや、旦那だし微妙なところだな」

それから何分たっただろうか……

ハイドさんの予想通りカツラミネさんは一向に姿を現さない。変わりに別の男が姿を現した。

確かイシムネ・ゴウという男だ。

「やあみんな！おはよう！いい朝だね！」

なぜか無駄にテンションが高い気がする……

「ええ・・・とイシムネさんですよ。おはようございます、どうかしましたか？」

そんなイシムネさんに礼儀良く対応するエリナちゃん。

(さ・・・さすがだわ・・・わたしには真似できないわよ あんな対応・・・)

「おお、確か桂峰の連れのヤツだよな？ご丁寧にどうも そうだ、桂峰はどこにいるか知ってるか？」

「ご主人様ですか・・・おそらくまだ眠っていらっしやると思いますが」

「マジかよ、相変わらずだなあ」

「あのお・・・イシムネ様はご主人様のお知り合いの方なんですか？」

「ん？そりゃあもちろん 昔にいろいろあつてな」

「よかつたら話を聞かせてもらえませんか？」

「え？」

「いえ、わたしたち実はご主人様について何も知らないんです、どういってお方なのかも」

「へえ、意外だな、俺はてっきりいろいろ知ってると思ったんだが・・・」

本当に驚いたかのように言う。

確かに・・・

確かにわたしたちはカツラミネさんについて何も知らない。強さだって、きつとわたしやハイドさんより強いと思う。

(知りたい・・・)

カツラミネさんやイシムネさんの過去に何があったのか・・・
カツラミネさんがどういう人なのか・・・

「そうだな、まあ本人も寝てるし、時間つぶしにな　話してやるよ
」

不適に笑ってイシムネさんが言う。
言葉の最後が妙にナマっている。

(んゝ何なんだろ？　こんな人たちばっかなのかな？カツラミネさ
んの周りって)

第十三話 金持ちの朝は決闘？

町がにぎやかになりかけている時間。

イシムネさんに連れられ、食堂で朝ごはんではあるがまた微妙な時間で食事をとっている。

わたしやみんなが食べ終わる頃にエリナちゃんが口を開く。

「イシムネさんってこんな豪華な暮らしをしてるんですね」

感心したように言う。

「ああ、確かに、職業柄大事な役職だしそれなりに金ももらってるからね」

「そうなんですか？どんな職業をしていらっしやるんですか？」

「この国のな、軍の総大将をやってる」

「総大将だって！？アンタそんな強かったのか！？」

イシムネさんの言葉を聴いてハイドさんが大声を上げる。
実際わたしも驚いた。

(人って案外見かけによらないのね・・・)

「フツ・・・まあね 少なくとも君よりは強いぜえ」

ハイドさんの驚きよつに調子にノツたのか、自慢げにそう告げる。

「ちよつとまてや！俺がアンタより弱いだと？聞きづてならねえなあ」

「お？何だ？ 俺とやるのかい？」

「言ってくれるじゃねえか いいぜ、やってやるよ」

何だかよく分からないけど一転しておかしな空気になってる。
やるゝとかやらないゝとか 男ってこんなものばかり・・・

朝食を終え、城のすぐ隣にある軍備施設にある広場にわたしたちは移動する。

「へっ謝るなら今のうちだぜ？総大将さんよ」

「言っとけ、勝つのは俺だかな」

挑発のし合いでより険悪な空気になってきてる。

2人とも額に青筋を立てながら「へっへっへっ」だの「あはははははは」だの笑いあってる。

目が笑ってないけど・・・

「まったく・・・どうしたらこうなるのかしら？」

「いいじゃないですか？2人とも楽しそうだよ？」

わたしの疑問に笑顔で答えるティルちゃん。

（楽しそう・・・ねえ）

「確かに、ご主人様とイシムネさんの昔の話をしてくれるってのからは大分離れてますよね」

さすがエリナちゃん、わたしの言いたいことを分かってくれていたらしい。

「まあいいけど、それよりハイドさんとイシムネさんどっちが勝つと思う?。」

「私はハイドさんだと思います、ハイドさんはああ見えて結構お強いんですよ」

「へえ〜意外ね」

「テイルはねえ〜引き分けだと思うなあ」

「あら、どうして?。」

「ん〜なんとなく?。」

小首をかしげながら答える。

(ん〜相変わらずテイルちゃんはかわいいわね〜ちっちゃいし)

「あっそろそろ始まるみたいですよ」

テイルちゃんのかわいさに癒されているとエリナちゃんが始まりを教えてくれる。

「いくぜええええ!..!」

「うおおおおおー!」

朝っぱらから盛大に叫び、ご近所迷惑もはなはだしいくらいに声が響く。

それが男の熱い？戦いの始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4419u/>

World of Fantasy After

2011年10月22日03時31分発行